

# 漁海況年報

平成26年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所  
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場  
(電話 0558-22-0835)

## [黒潮流路]

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成26年1～12月の各月前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

平成26年の黒潮流路は、1～3月前半まではC型で推移し、伊豆諸島付近では一時的に32°N以南付近まで離岸して流れた。3月後半～4月後半には小蛇行が東進したことで、B、C型を繰り返し、5月前半にN型となった。この時に伊豆諸島東側や遠州灘沖から沿岸域へ暖水が波及した。その後、6月前半に一時的にB、C型となった他は、12月後半までN型で推移した。この間、三宅島付近に接岸することが多く、伊豆諸島北部から相模湾、遠州灘には頻りに暖水が波及した。

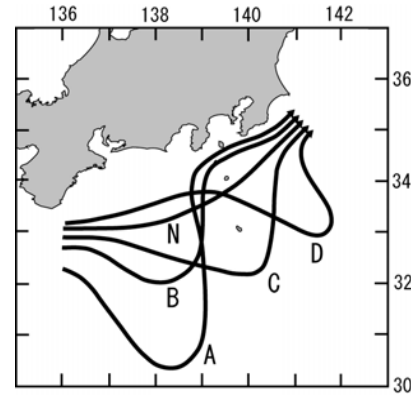


図1 黒潮流型の区分  
(海上保安庁海洋情報部より)

表1 黒潮流型一覧表 資料: 海洋速報(海上保安庁)、関東・東海海況速報

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
12年	C	C	CW	W	WB	B	BC	CW	WB	C	C	C
13年	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C	C
14年	N	N	N	N	N	N	N	NB	N	N	N	N
15年	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C
18年	N	N	N	NB	C	CW	CN	N	N	N	N	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	N
20年	C	C	N	N	N	N	B	B	C	C	C	CD
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C
22年	D	DN	N	BC	N	NW	WB	C	CD	D	N	N
23年	N	N	N	B	B	CW	C	DW	N	BC	C	DN
24年	N	N	N	B	C	C	CD	N	B	C	C	DN
25年	CW	ND	D	DN	N	N	NB	B	BC	C	C	C
26年	C	C	C	C	C	WB	C	BC	N	N	BC	N

\* 静岡県水産技術研究所一部改変

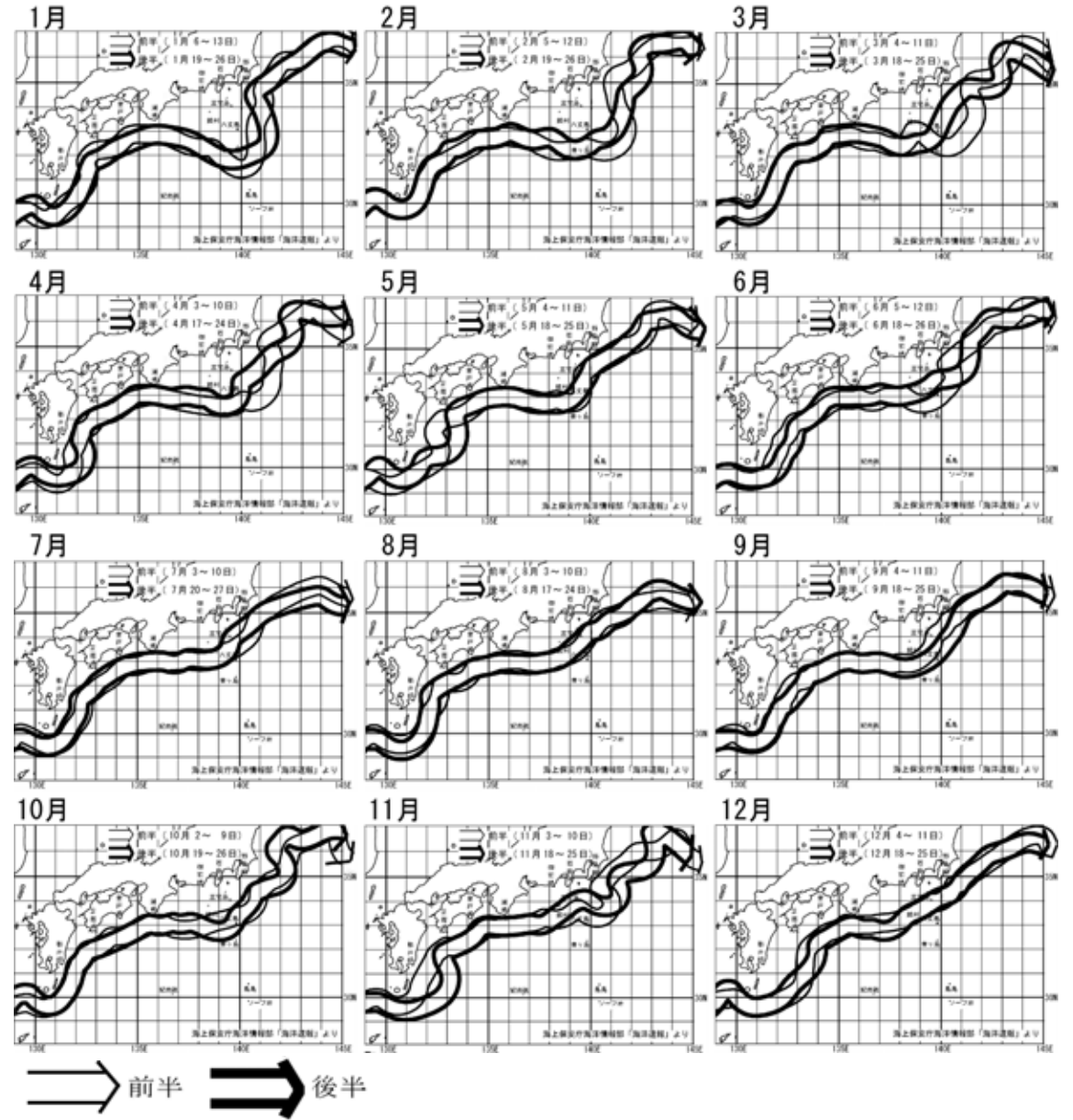


図2 黒潮流軸の変動(海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より)

**[県下沿岸域]**

図3に平成26年1~12月の旬別の沿岸水温の変化を示した。1~3月上旬は、相模湾側では概ね「平年並」、駿河湾では、「平年並」~「低め」で経過した。4~6月は、相模湾側では「平年並」~「やや高め」、駿河湾では曇見で低め基調であった他は概ね「平年並」で経過した。7月上旬の暖水波及で相模湾側では「高め」、駿河湾では「やや高め」となったが、7月中旬には概ね「平年並」となった。8月は全域で「やや低め」~「低め」で経過し、9~11月は相模湾側では「平年並」~「やや高め」、駿河湾東部では「平年並」~「低め」、駿河湾西部では「平年並」で経過した。12月は全域で「やや低め」~「かなり低め」となり、中旬には沼津で平年比-3.0、地頭方で平年比-2.8となった。

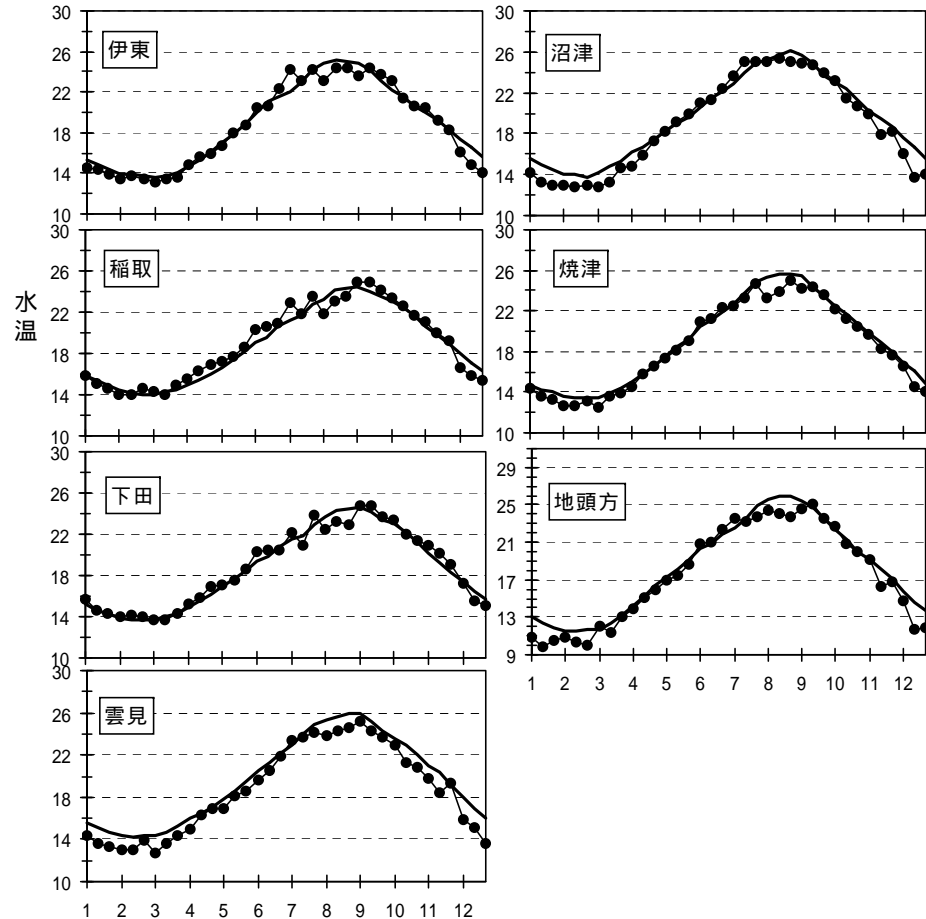


図3 平成26年1~12月の旬別沿岸水温の変化  
(縦軸は水温、横軸は月を示す)

**[サバたもすくい棒受網]**

1 たもすくい

平成26年の伊豆諸島海域におけるたもすくいの操業は、三本でゴマサバを対象として1月7日に始まった。マサバ主体の操業は、1月29日に三本で始まった(1夜1人当たりの水揚量:521kg)。その後も三本で、3月下旬までマサバ主体の操業が続いた(1夜1人当たりの水揚量:543~1,595kg)。同期間、伊豆諸島北部海域では2月前半に房総沖からの暖水波及によって水温が15~16台で経過し

たが、漁場は形成されなかった。

4月上旬からは三宅島北側にマサバ漁場が移った(1夜1人当たりの水揚量:1,113~1,691kg)が、4月中旬からは再び三本が漁場となり、5月中旬前半まで操業が続いた(1夜1人当たりの水揚量:911~1,210kg)。

5月中旬後半は大室出しにマサバ漁場が形成された(1夜1人当たりの水揚量:423kg)が、漁況は安定せず、黒潮から20~21台の暖水が波及した下旬には漁場形成はなくなった。5月下旬以降、操業の対象はゴマサバ主体となり、マサバは5月下旬に大島、6月上旬に三本で、わずかに漁獲されたのみであった。6月は三本にゴマサバ主体の漁場が形成された(1夜1人当たりの水揚量986~1,049kg)。

今漁期のマサバのCPUEは、11.8トンで、2012年漁期以降、3年続けて高い水準となった(2012年:12.5トン、2013年:10.8トン)。平成26年1~6月の主要7港<sup>1</sup>への総水揚量は、マサバが2,781トンで前年(2,325トン)の120%、ゴマサバが411トンで前年(1,408トン)の29%であった。

1 千葉県:千倉・富浦、神奈川県:三崎・長井、静岡県:伊東・沼津・小川の7港。

2 棒受網(平成26年1~12月)

平成26年の伊豆諸島海域における棒受網操業は、1月24日から始まった。漁場については、たもすくい漁業同様に、主に三本、三宅島周辺で推移した。

平成26年の静岡県主要4港<sup>2</sup>における棒受網(一部たもすくいを含む、以下同じ。)の1日1隻あたりゴマサバ水揚量は17.2トンで、前年(18.1トン)の95%、前々年(21.4トン)の80%であった。総水揚量は、マサバが1~5月を中心に1,528トンで前年(1,031トン)の150%、ゴマサバが6,574トンで前年(6,990トン)の94%であった。マサバ水揚量が前年を上回った理由として、太平洋系群の資源量の増加により、来遊量が増加傾向にある可能性が考えられる。ゴマサバ水揚量が前年を下回った理由として、マサバ資源の増加により、2~5月にマサバ主体の操業が増加したためと考えられる。

2 伊東・静浦・沼津・小川の4港。

3 小川港におけるサバ類単価

平成26年の小川港における棒受網(一部たもすくいも含む)のサバ類月別単価は、マサバが165~301円/kg(1~5月)、ゴマサバが73~116円/kgであった(表2)。水揚の主体となったゴマサバについては、年間を通じて70円/kgを上回って推移した。この理由として、水揚量の減少や、カツオ節加工の代替品としての需要、輸出品である缶詰相場等が影響したと考えられる。

表2 小川港(焼津市)における棒受網・たもすくいのサバ類月別単価 単位:円/kg

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成20年(2008年)	マサバ	-	315	489	315	173	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	98	96	92	83	78	90	72	61	51	48	56	58
平成21年(2009年)	マサバ	-	486	405	169	108	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	53	75	56	56	56	56	54	50	38	36	36	37
平成22年(2010年)	マサバ	35	249	260	126	231	253	204	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	71	61	79	63	63	66	57	42	36	39	37	39
平成23年(2011年)	マサバ	-	216	225	169	280	450	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	48	54	58	62	62	58	56	51	54	54	53	48
平成24年(2012年)	マサバ	271	138	263	172	103	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	52	46	51	51	46	52	62	59	59	56	58	59
平成25年(2013年)	マサバ	485	182	93	132	93	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	107	80	72	78	75	82	82	82	75	76	83	91
平成26年(2014年)	マサバ	193	301	229	215	187	165	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	101	170	110	105	92	85	91	91	94	73	83	116

**[サクラエビ船曳網]**

春漁は3月24日夜～6月9日夜(漁期は3/23～6/10)にかけて操業が行われた。出漁日数は19日、漁獲量は720トンで、漁場は主に富士川～由比沖及び相良沖に形成された(前年の出漁日数は25日、漁獲量は843トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長33.9mmの0歳エビ(前年は34.6mm)と平均体長39.8mmの1歳エビ(前年40.6mm)の2群で、0歳エビが主体であった。

秋漁は10月30日夜～12月24日夜(漁期は10/30～12/24)にかけて操業が行われた。出漁日数は12日、漁獲量は228トンで、漁場は主に焼津～相良沖に形成された(前年の出漁日数は16日、漁獲量は441トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長28.5mmの0歳エビ(前年は30.6mm)と平均体長39mmの1歳エビ(前年は38.4mm)2群で構成された。

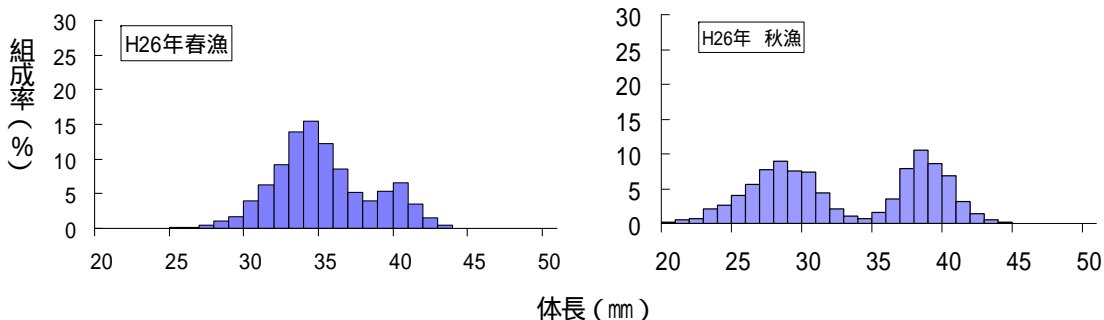


図4 平成26年春・秋漁のサクラエビ体長組成

**[竿釣近海カツオ]**

・水揚量と魚価

平成26年の静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は1,124トンで前年の1,705トンを下回り、過去5か年平均(1,862トン)の60%、現在の統計では平成2年以降で最も少なかった。魚価は402円/kgで前年の327円/kgを上回った。

・漁況(漁場形成と魚体)

近海竿釣り船のQRY、御前崎港での市場調査による小笠原と伊豆諸島周辺の漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1月 水揚げがなかった(1月に水揚げがないのは、現在の統計で平成2年以降初めて)
- 2月 近海竿釣り船が19～22°N、138～141°Eの中南海域で特特大(尾叉長75cmモード)特大(尾叉長69cmモード)カツオを主体に小・極小(尾叉長44cmモード)カツオを漁獲した。
- 3月 近海竿釣り船が19～21°N、136～138°Eの中南海域で特大・特特大(尾叉長73cmモード)極小(尾叉長42cmモード)カツオを漁獲した。
- 4月 近海竿釣り船が19～20°N、132～139°Eの中南海域で特大(尾叉長67cmモード)カツオを中心に少量の極小(尾叉長38cmモード)カツオを漁獲した。月末になって伊豆諸島海域で漁場が形成され、沿岸竿釣り船が小(尾叉長46cmモード)カツオを漁獲した。
- 5月 近海竿釣り船が房総沖のピンナガ操業に移行したため、以後は沿岸竿釣り船が水揚げの主体となり、30～32°N、138～140°Eの伊豆諸島海域で小(尾叉長44cmモード)カツオを漁獲

- した。
- 6月 30～33°N、138～140°Eの伊豆諸島海域で小・極小(尾叉長43cmモード)カツオを漁獲した。
- 7月 30～34°N、138～140°Eの伊豆諸島海域で小(尾叉長44cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 8月 沿岸竿釣り船と近海竿釣り船が31～34°N、139～140°Eの伊豆諸島海域で小(尾叉長45cmモード)カツオを主体に、特小(35cmモード)から中(57cmモード)や特々大(73cmモード)まで幅広いサイズのカツオを漁獲した。
- 9月 沿岸竿釣り船が31～34°N、138～140°Eの伊豆諸島海域を中心に、チン(尾叉長37cmモード)・小(46cmモード)カツオを主体に漁獲した。一時的に御前崎沖に漁場が形成し、日戻り操業による水揚げがあった。
- 10月 31～34°N、137～139°E付近の大王崎東沖や伊豆諸島海域を中心に、極小(尾叉長41cmモード)や中(52cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 11月 31～34°N、137～139°E付近の伊豆諸島海域を中心に遠州灘沖や石廊崎沖でチン(尾叉長34cmモード)小(45cmモード)中(52cmモード)カツオを漁獲し、近海竿釣り船は中旬に沿岸竿釣り船は下旬で終漁となった。
- 12月 水揚げがなかった。

表3 平成26年近海・沿岸竿釣り船のカツオ水揚量等(県内主要5港)

年 月	水揚量 (トン)	水揚 隻数	水揚/隻 (トン)	平均単価 (円/kg)	主漁場と魚体 ( )内は体長モード、単位はcm
26年 1月	0	0	-	-	
2月	89	6	14.8	365	中南・小笠原諸島周辺(44, 69, 75)
3月	105	6	17.5	382	中南・小笠原諸島周辺(42, 73)
4月	175	21	8.3	310	中南・小笠原諸島周辺(38, 67)・伊豆諸島周辺
5月	178	38	4.7	382	伊豆諸島周辺(44)
6月	194	47	4.1	305	伊豆諸島周辺(43)
7月	93	43	2.2	395	伊豆諸島周辺(44)
8月	100	45	2.2	464	伊豆諸島周辺(35, 45, 57, 73)
9月	80	48	1.7	463	伊豆諸島周辺・遠州灘(37, 46)
10月	70	38	1.8	690	伊豆諸島周辺(41, 52)
11月	42	26	1.6	727	伊豆諸島周辺・石廊崎沖・遠州灘(34, 45, 52)
12月	0	0	-	-	
26年 計	1,124	318	3.5	402	
25年 計	1,707	346	4.9	327	
5か年平均	1,862	406	4.6	410	平成21～25年の平均



**【まき網】**

1 マイワシ

本年の静浦漁港における水揚げは無かった（前年：なし、平年：21.4トン）  
 沼津港における総水揚げ量は1,087.6トンで、前年（2,655.2トン）の41%、平年（2,288.5トン）の48%とやや低調であった。月別にみると、3月に232.1トン、5月に177.2トン、10月に532.8トンとそれぞれまとまった水揚げがあった。  
 小川港における総水揚げ量は485.9トンで、前年（1628.3トン）の30%、平年（1159.8トン）の42%と低調であった。月別に見ると4月に年間の65%を占める316.6トンのまとまった水揚げがあった。  
 伊東港における総水揚げ量は613.4トンで、前年（28.6トン）の21.4倍、平年（730.2トン）の84%であった。月別にみると、3月に143.5トン、10月に124.1トン、11月に124.2トンとそれぞれまとまった水揚げがあった。水揚げ物の被鱗体長の測定調査結果によると、最頻値(0.5cm刻みで階級分け)が、3月には20.5cmの銘柄「中羽」が主体であったが、7月に11.0~12.0cm、8月に11.5~13.0cm、9月に13.0~13.5cm、10月に14.0cm、11月に13.5~14.0cmと、夏以降は「小羽」が主体となった。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港では5月に3.3トンの水揚げがあった（前年：なし、平年：278.4トン）  
 注）平年：過去5か年（平成21~25）平均

**【シラス船曳網】**

平成26年シラス漁は3月22日から始まった。平成26年3月~平成27年1月の主要6港（静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居）における総水揚げ量は8,043トンで、前年（6,055トン）の133%、平年（7,118トン）の113%と、前年、平年を上回った。また、総水揚げ金額は4,282,104千円で、これも前年（3,020,763千円）の142%、平年（4,069,409千円）の105%と、前年、平年を上回った。平均単価は532円/kg、これは前年（499円/kg）の107%と上回ったが、平年（570円/kg）の93%と下回った。

1日1か統当りの水揚げ量の推移を月別にみると、3月は130kg（駿河湾92kg、遠州灘183kg）と平年（210kg）の62%と低調に始まったが、4月は563kg（駿河湾573kg、遠州灘557kg）で平年（394kg）の143%、5月は1,014kg（駿河湾798kg、遠州灘1,118kg）で平年（487kg）の208%と好調であった。特に活況を呈した5月には“プール制操業”が一部漁場で実施された。6月に423kg（駿河湾349kg、遠州灘604kg）に急減し、平年（363kg）の117%の水準となった。7月は331kg（駿河湾434kg、遠州灘230kg）で平年（493kg）の67%、8月は237kg（駿河湾282kg、遠州灘209kg）で平年（483kg）の49%、9月は208kg（駿河湾225kg、遠州灘198kg）で平年（442kg）の47%と7~9月に低調となったが、遠州灘でより振るわなかった。漁況は10月下旬に好転し10月は485kg（駿河湾425kg、遠州灘514kg）で平年（404kg）の120%、11月は387kg（駿河湾397kg、遠州灘382kg）で平年（256kg）の151%、12月に271kg（駿河湾150kg、遠州灘336kg）で平年（208kg）の130%と、10~12月はこの時期としては好調となった。

5月及び11月は1985年（昭和60年）以降で2番目に高い値、12月は最高値であった。  
 月別水揚げ量の推移をみると、3月は28トンで平年（61トン）の45%、4月は1,385トンと平年同期（612トン）の226%、5月は2,618トンで平年（1044トン）の251%と4月~5月は好調であった。6月以降は低調となり、6月は544トンで平年（798トン）の68%、7月は445トンで平年（1260トン）の35%、8月は380トンで平年（921トン）の41%、9月は368トンで平年（906トン）の41%と、期待されていた夏季に盛期がみられなかった。10月下旬に漁況が好転し、10月は1,142トンで平年（847

トン）の135%、11月は756トンで平年（468トン）の177%、12月は304トンで平年（181トン）の168%と平年を大幅に上回った。なお、11及び12月は1985年（昭和60年）以降の最高値であった。

平均単価の推移をみると、春季の好漁を受け4~7月は平年を下回った。特に4月は平年比52%の292円/kgまで下落した。一方、夏季の不漁を受け8~10月は平年を上回った。特に9月は平年比176%の1,059円/kgまで上昇した。

4・5月を中心にマシラスの混獲がみられた。提供された漁獲物試料の種査定結果によると、3~12月のマシラスの推定水揚げ量は549トンで、これは平成15年以降で最高値である。また、3~12月の種組成はカタクチシラス92%、マシラス7%、ウルメシラス1%未満と推定された。

注）平年：過去5か年（平成21~25）平均

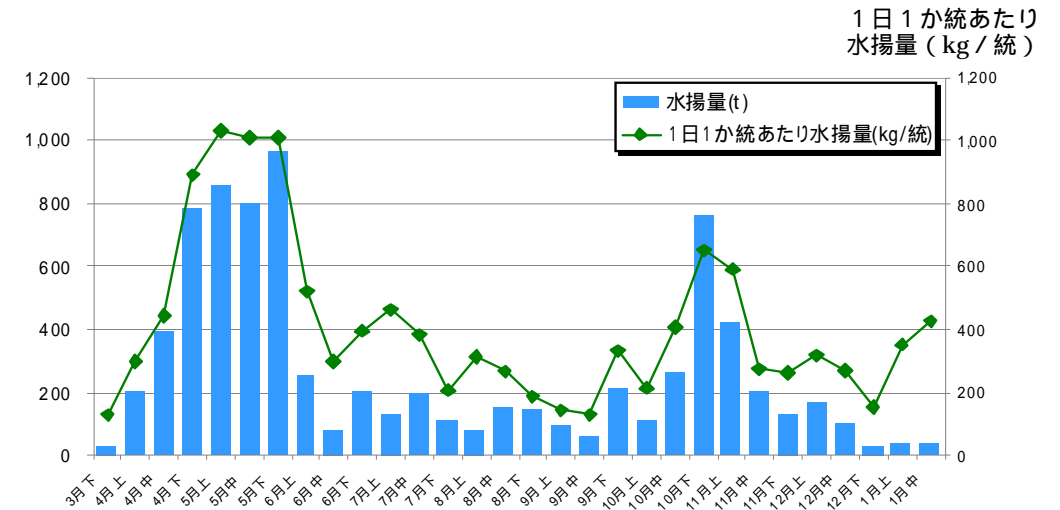


図5 平成26年主要6港旬別シラス水揚げ量と1日1か統当たり水揚げ量の推移

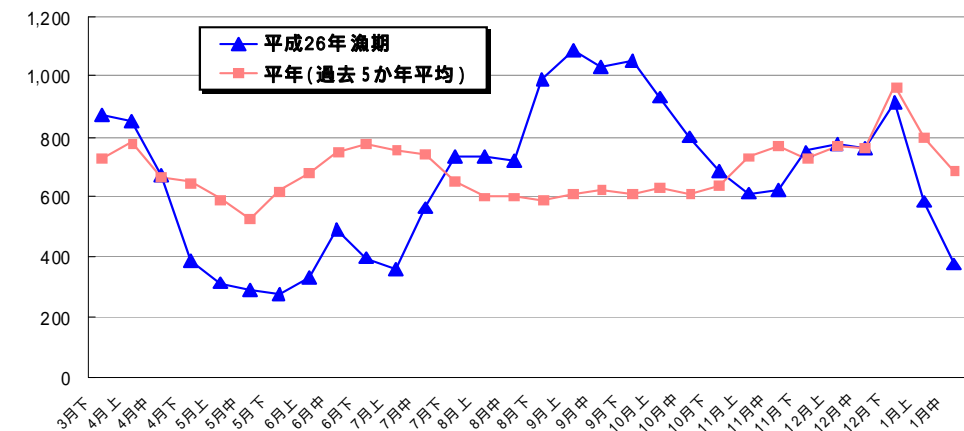


図6 平成26年主要6港旬別シラス単価の推移

**[定置網]**

平成 26 年の伊豆半島東岸大型定置網 7 か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の漁獲量は 5,323 トンで、前年漁獲量 4,461 トンの 1.2 倍、平年漁獲量（昭和 57 年～平成 25 年平均）3,980 トンの 1.3 倍であった。月別に漁獲量をみると、1～3 月に平年を大きく上回る漁獲がみられた（図 7）。

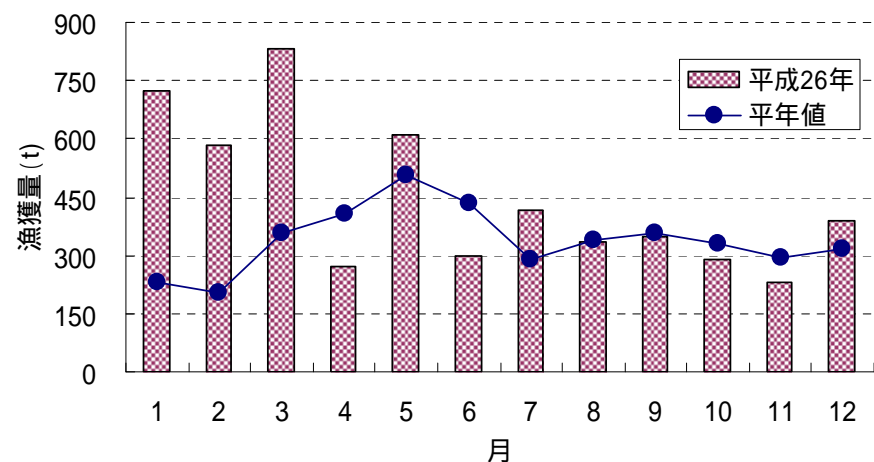


図7 月別漁獲量の推移

また、漁場別の漁獲量では谷津漁場を除き前年を上回り、北川、古網、川奈漁場の順に多く漁獲された（図 8）。

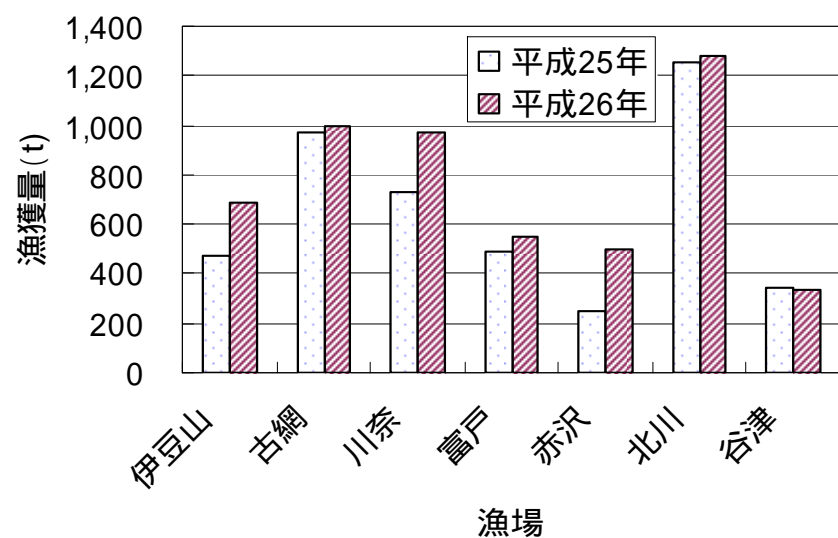


図8 漁場別漁獲量

魚種別の漁獲量ではマイワシ、ウルメイワシが前年を大きく上回る漁獲量で、マアジを除いて平年を上回った（表 4）。さば類はマサバ当歳魚が増加し、マイワシは小型魚が主体であった。スルメイカは前年の来遊が遅れ、1-2 月多く漁獲されたが、12 月には例年通り来遊があり、大型個体が漁獲された。ブリはワラサ銘柄を中心に漁獲された。マアジはじんだ銘柄が 268 kg と過去 2 番目に低く、減少傾向にある。表 4 以外では、ハガツオは 10-12 月に多く、86.2 トン漁獲され、前年の 965 倍であった。

表4 多獲された魚種の漁獲量

魚種	漁獲量 (トン)	前年比	平年比
さば類	1264.0	1.4	1.3
マイワシ	759.9	8.9	2.3
スルメイカ	718.4	1.0	3.6
カタクチイワシ	706.3	1.3	1.8
ブリ	645.8	1.2	3.1
シイラ	184.5	1.0	3.2
マルソウダ	174.2	0.4	2.1
ヤマトカマス	159.5	1.0	2.4
マアジ	107.6	0.6	0.1
ウルメイワシ	93.2	3.4	1.6

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/mobile/>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星 NOAA の海面水温分布画像と関東・東海海況速報を見ることができます。

